

平成30年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 山口県 】

| | |
|---------------|---|
| 1 実践テーマ | 【 I III V 】 |
| 2 実施対象者 | 萩市立大島小中学校 (萩市の規則による小中一貫教育校) 全校児童生徒47名(小学校29名、中学校18名)、保護者50名) |
| 3 展開の形式 | (1) 学校における活動 ① 教科名 (道徳・特別活動) ② 行事名 () ③ その他 (人権教育参観日・講演会) (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 () |
| 4 目標 (ねらい) | <ul style="list-style-type: none"> ・車椅子バスケットボール選手との交流を通して、個人の特性に応じてスポーツに親しみ、豊かな人生を送っていることを知り、遊びや運動、とりわけパラスポーツに対する関心・意欲を高める。 ・障害者と健常者とがパラスポーツと一緒に楽しむことを通して、共生社会を構築していくための課題の理解と、その解決に向けた実践的な態度を育てる。 |
| 5 取組内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・事前の学習として、視覚障害者ランナーとして障害者スポーツ大会「キラリンピック」に、前身の大会を含めて30年連続出場し、数多くのメダルを受賞されている野坂千恵子さん(山口県熊毛郡田布施町在住)を招いて、障害者スポーツに関する講話を聞いたり、アイマスクを使った「ブラインドランニング」の体験をしたりする授業を行った。また、北京、ロンドン、リオの3回のオリンピックのカヌー競技で3つの銀メダルを獲得したデビッド・フローレンス選手(英国代表)が、萩市内にトレーニングに来られた際に本校にお越しいただき、交流行事を行った。 |
| |  |

- 車椅子バスケットボール体験学習当日は、まず人権教育参観日において「障害者問題」に視点を当てた道徳、学級活動の授業を各学年（中学校は全校道徳）で行った。

小学1年：「不自由さを体験してみよう」（学活）

小学2年：「障害がある方への理解を広げよう」（学活）

小学3・4年（複式）：「障害者との関わり方を考えよう」（道徳）

小学5・6年（複式）：「自分の生活について振り返ろう」（道徳）

中学1～3年：「雪の日の出来事」（合同道徳）



- 全校児童生徒に来校した保護者も加えて、車椅子バスケットボールに関する講演と体験学習を行った。

講演、体験学習「車いすでもスポーツできるよ！」

講師：山口県車いすバスケットボール連盟 理事長

河本 公成（かわもと まさなり）氏 他（全6名）

始めに車椅子バスケットボールや競技用の車椅子と一般的な車椅子との違い等について、講師の話聞いた後、実際に競技用の車椅子に児童生徒（一部教員、保護者）が乗ってスポーツを体験した。

前進、後退といった単純な動きから始めて、徐々に複雑な動きを加えていき、最終的にはバスケットボール（小学生はポートボール）のミニゲームを行った。

体験活動後に、児童生徒からの質問に対して答えていただき、講演を終了した。講演の後も、一部の中学生は車椅子を片付ける作業（分解、運搬等）を体験させていただいた。



- 事後学習として、車椅子バスケットボールを体験した感想を文章にまとめた。

| | |
|----------------------------------|--|
| <p>6 主な成果</p> | <ul style="list-style-type: none"> • 車椅子に乗った経験のある児童生徒は数人いたが、バスケットボール競技用の車椅子に乗るのはみな初めてのことであり、比較的軽い力で移動できたり、その場で回転できたりすることに、多くの児童生徒が驚いていた。道具や環境を整えば、障害があっても好きなスポーツを楽しめることを実感することができた。 • 来校された講師の中に 2 名の健常者がおられたことから、障害のある方と健常者とがともにスポーツを通じて楽しんでおられる現状を知ることができた。 • 児童生徒の感想より（一部抜粋） 「健常者も一緒に車いすバスケットに参加していることがすごいと思いました。だれもが一緒に楽しめるスポーツだと思いました。そして、人に合わせた車いすがあることが分かりました。」 「障害者でなくても車いすバスケットができることを初めて知りました。ずっと障害者だけがするスポーツだと思っていたのでびっくりしました。」 「今回の学習で、車いすバスケットを試してみたくになりました。生活用の車いすとはちがって、タイヤの形がハの字になっていました。それは手をはさまないためだと知りました。」 「様々なルールがあり、誰でも平等にプレーできるスポーツであるということを知りました。障がいの有無に関係なく、みんなが楽しめるスポーツだと思いました。」 「体が不自由でも、スポーツをする大切さ、スポーツと前向きに向き合っている姿がとても心に残りました。また、ひとりの人間としてみんなと一緒に接していく、ということを考えていきたいです。」 |
| <p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p> | <ul style="list-style-type: none"> • 小学生と中学生と一緒に、これからの時代に求められる共生社会の構築に向けた人権意識の高揚を柱にこの学習を行うこととした。 • 小規模校であるため、全員が十分に体験できるよう、10 台の車椅子を用意していただいた。全員の児童生徒が 3～4 回ずつ交代しながら徐々に高度な操作を伴う体験を行う中で、競技の楽しさ、おもしろさ、そしてこの競技の意義や価値を実感できたようである。 • 事前の学習においては、オリンピックやパラリンピック等、スポーツにおける自己実現を目指している多くのアスリートが世界中にいて、自らの個性や特性を活かして競技に取り組んでおられる様子を学習できるよう配慮した。 |
| <p>8 主な課題等</p> | <ul style="list-style-type: none"> • 今回の事業は、体験そのものが児童生徒にとってとても心に残るものであった。それだけに、単なる活動に終わらぬよう、事前、事後の学習において、その目的等を確認した上で、自分自身の考え方の変化したところや成長した点を記録させることが重要である。 • 中規模以上の学校では、一人あたりの体験が少なくならないよう、全体の時間設定や車椅子の数をさらに増やす等の工夫が必要である。 |
| <p>9 来年度以降の実施予定</p> | <ul style="list-style-type: none"> • 来年度もパラスポーツに関する体験活動を行いたい。 • 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの出場を目指すアスリートに焦点を当てた道徳や特別活動等を通して、児童生徒がこれからの生き方を考え、自分を取り巻く環境の中で自らの目標に向かって主体的に学ぶキャリア教育を進めていきたい。その際、「パラリンピック教育教材」(I'mPOSSIBLE 日本版事務局発行)等の活用を図りたい。 |